

幼小接続期を考える

永倉みゆき
本田祐吾
杉浦真紀子
横井紘子
浜口順子
(司会)

浜口 皆さんこんにちは。今回の改訂で、幼稚園教育要領・保育所保育指針等に「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が記され、小学校との連絡、連携が一層意識される内容になりました。今日は、幼児期と学童期入口の接続期をテーマに座談会を企画しました。お越しいただいたのは、目下、幼稚園、小学校の担任をされ、共通のお子さんをリレーで担当されたこともある杉浦先生、本田先生。横井先生は、幼稚園で担任をした経験もあり、

幼保小連携に関する著書があります。そして永倉先生は、幼稚園と小学校の両方で教員をされたことがありますね。今日は、幼児教育段階から小学校への移行を経験する子ども自身の立場になるべく近づいて、自由におしゃべりしたいなと思っています。よろしくお願ひします。

言葉掛けへの配慮

永倉 幼稚園を卒園した子どもが学校帰りに園に寄って、「先生がね、英語しゃべるからわからないんだよ」って言ったことがあったんです。先生が英語をしゃべるわけではないんだけど、高学年から降りてきた先生だと、使っている言葉がね、わからない。「起立」とか「礼」とか、そういう言葉ですから。「英語しゃべるから全然わかんないんだよ」って怒るんです。

本田 それ、わかります。私、最初の一年生を担当した時は、六年生の後だったんですよ。

永倉みゆき (静岡県立大学短期大学部こども学科教授)
杉浦真紀子 (お茶の水女子大学附属幼稚園教諭)
浜口順子 (お茶の水女子大学教授)

本田祐吾 (お茶の水女子大学附属小学校教諭)
横井紘子 (十文字学園女子大学人間生活学部
幼児教育学科准教授)

永倉 それは大変でしたね

本田 そう、話すスピードが全然違います。

一同 あゝ。

本田 あと、使っている言葉が難し過ぎちゃうんですよね。

永倉 そうです、そうです。

本田 低学年を多く受け持つ先生に、「つまり」

「要するに」を絶対使うなど言われましたね。

永倉 「適当に」とかね。実習生もよく使うんですけど、これではわからないだろうなと思つて。

本田 小学校の先生は、多分びつくりするくらい「つまり」と「要するに」を使っている気がしますね。

一同 あゝ。

永倉 オノマトペの研究をしている学生がいるのですが、体の動きを表現する「ぐるつと回って」というような言葉が、割と保育の中では使われます。小学校ってそういう言葉で

は言わないから、円形に広がってほしいときに「丸くなってください」とかって言われると子どもは、こうなっちゃう（頭を抱える）んですよね。

一同 （笑）

永倉 そうなのが一年生の生活には、いっぱい詰まってる感じがする。

本田 さすがに丸くなっているのは見たことないけど、もし目の前にいたら「それもありだね！」って（笑）。逆に「なるほど！」って思います。私は、そういう言葉のズレがあるときは、使った後にその言葉を説明するとか、必要に応じてします。さっきの「つまり」も、使いたかったら教えればいいわけで、そうしながら少しずつお互いの文化が歩み寄りようなことを意識しています。

浜口 やっぱりそれって小学校的なのかな？

杉浦先生、幼稚園ではどうでしょうか？

杉浦 みんなで話すときに、どの辺の言葉が



▲(左から) 本田祐吾氏・杉浦真紀子氏

この子どもたちと話すにはちよūdい言葉なのかつていうことはやっぱり考えます。本田先生が言ったように、ちよūdと難しく言い過ぎたかなって思うと反省するし、自分で言う方が難しくなってきたり思ったり、もっと柔らかく、とか。今担任している三歳だと、「あく」とか「あちゃちゃ」とか、自分が幼児化していて。そういう私を年長さんが「へへへ」という顔で見ているのも感じます。本田先生もそんな感じですか？

本田 やっぱり合わせるということなのだと思うのですが、ただ「小学校に来たぞ！」という思いも子どものほうにはあるはずだから、背伸

びさせるとまでは言われないけれども、少し変化があってもいいかもしれないと思いますね。

一年生の新しい体験

永倉 ちよūd五歳児を卒園させた後で、一年生を担当した経験があるんですけど、信じられないくらい子どもは小学校に上がるということを自分の励みにして、留学みたいな感じで、頑張ろうと思ってくるんです。それは幼稚園に入るときとは全然違います。幼稚園はみんな間違いなく遊びに来るんだけど、小学校は勉強しようと思っただけで来ているから、それを援助するというのはとても大事です。そこで遊んではかりいたら、子どもはがっかりしますから。

以前、本田先生の授業で、子どもが一生懸命言葉にするのを、先生が真剣に、誠実に、一緒に考えてくれる場面を、素晴らしいなあ

と見て見えていました。でも、そういう先生が少ないと感じます。割と自分の枠があつてそれに入れる感じが多いかな。また、私は幼稚園がベースだったので、小学校で子どもが全員こつちを向いて座っているのが、すごく気持ち悪い感じだった。小学校に入学すると、机が皆、前を向いて並んでいるんですけど、私は早いうちからグループで座る形にしちゃったんですよ。そうしたら同僚の先生から「信じられない、そんなことすると不安で授業できないわ」って言われたの。やっぱり小学校の先生がもっている子どももつながっている、という体の感覚とは違っているように思います。保育では、こちらを向いて座っていないかともつながっている感覚つてありますよね。その中間みたいなのが多分接続期。子どもは両方ちゃんとわかかって使い分けて、だんだん小学校のやり方というのがわかってくるので、大人はそこを理解した上で教えて

いくのが重要なつて。

横井 大学の授業

で幼保小連携の話

をしていたとき、

ある学生が、小学

校では先生にあて

られないとしゃべ

つてはいけなくな

る、と言ったんですね。幼稚園では、集まる

時間や場所はあつても、「先生、先生」つて子

どもが前に出ていくことが自然だったりする。

もちろん「ちよつと座つて」つていうときは

あるにしろ、それはルールとしてはそこまで

厳密じゃない。小学校はそれが暗黙のルール

なのでしょうか？ 最初にルールとしてしつ

かりお約束するのですか？

本田 学校はきつちりありますね。私はあまりやりませんが、普通はもうきつちり。先生



▲(左から) 横井 紘子氏・永倉 みゆき氏

によつては筆箱を置く位置まで決めますからね。あとよくあるのは、声の大きさの物差しが教室にバンと貼つてあつたりします。

横井 声の大きさをチャネルのようにな？

本田 今は「2」の声でしゃべろうとか、アリの声とか、象の声とか。

永倉 幼稚園から小学校に行つて一番びつくりしたのは、廊下にね、「廊下を走るな」って書いてあるわけ、字で。でも読めないわけよね、小学校一年生だと。それで、走るなって書いてある所を走ると怒られる。小学校って基本、言葉の文化なんですよね。「ちゃんと言つたでしょ」とか。子どものほうも意見を言わないとだめなんですよね。言うとか書くとかできないと、「頑張ろう」って言われちゃうので。幼稚園では話せることが前提にはならないので、先生が聞き取ろうとする気持ちのほうが強い。

冗談ではなくて、私は最初の頃、小学校つ

て修行させる場なんだって思いました。廊下は走れと言わんばかりの環境なんですよ、そもそも。けどそこに「走ってはいけない」って書いてある。学校は意識で体の動きを止めるということをやらせる所なのかと思ひました。幼稚園では感じた通り動くと「すてきね」って言われてたのに、それを学校でやると、「ここでやっちゃいけないよ」とか「今はやるときじゃない」とか「時間を見て」とか、いろいろ考えて行動することが求められちゃう、そんな感じがしました。

浜口 子どもは小学校を楽しみに、ちよつと違う世界に行くと思つて来るから、そういう新しいことが起こるのがね、うれしい面もあるかもしれない。でもだんだん慣れてくると無理が来ちゃう。お茶大附属では「なめらかな接続と適度な段差」とよく言いますが、いろんなルールがあるっていうのは「適度な段差」ですね。珍しくて面白がつているうちは

いいけれど、なんかちよつとずつ無理が来てしまうのは問題なんでしょうね。

大正時代の幼小接続と比べて

浜口 幼小接続に係るアーカイブズ記事として、今回、山内俊次氏の大正末（一九二三年）の「幼児最初の學校生活」（この後の15〜21ページに転載）を皆さんにも読んでいただきましたが、この山内さんという方は約百年前の附属小学校の先生、本田先生の先輩にあたります。

永倉 文中「四」の初めの「私の学級に於ては、多少新しい試みとして……」のところ、「即ち一斉教授といふことを少くして個別指導といふものに力をつくしてゐることなどもその中の一つであります」と書いてあるんですけど、必ずしも幼稚園は個別な活動ばかりではないし、一斉の授業でもすごく自由感がある先生もいらつしやる。

浜口 今は、個別指導 vs 一斉授業という単純な対比では語りにくくなっているかも。

本田 その前の「三」では、体を横にしないとか机の間を通れないということとか、子どもたちが規則正しく同じ方向を向いて「一壇と高い所に教師が」いることとか、教壇がある当時の教室の様子を暗に批判している。やっぱり、大正自由教育の時代は、教壇を廃するというところがあった。その中で個々に応じる。つまり、一斉指導というのは、みんなで同じ時に同じものを注入するというシステムだった。

永倉 生活科ができた頃に私は小学校に戻ったんですけど、ある先生が「まさか、みんなで朝顔なんかまいていないでしょうね？」と言うんですよ。「今はもう、生活科の時代ですから、一人ひとり好きなものをやるようにしなきゃいけない」みたいに言うんだけど、私、それは違うと思って。同じ朝顔であつても、

かわり方が違うっていうのが子ども。

浜口 一人ひとり違うことをやるのがいい、とも言い切れない？

永倉 そうそう。そういうことじゃないですよね、幼稚園って。そこがうまく表現できればいいなと思いつながらここを読んだんです。だからそういうふうに関別vs一斉と対比させて捉える先生たちは、生活科が始まってびっくりしたと思う。「生活科って、何教えればいいんだ？」と。「幼稚園みたいなのに、みんなばらにやる方がいいんだ」みたいに考えて。でもそれはちよつと違う。

横井 「教室の何れの部分へでも、各自腰掛ばかりを携へて自由に集合して、其日経験したことどもを各見話しあひ」の部分が、十数年前に私が見た附属小学校の授業内容と近いなと。今「主体的・対話的で深い学び」がキーワードになって、大学では方法としてアクティヴ・ラーニングなどと言われますが、対話が

できないグループでアクティヴ・ラーニング

をやらせるほど無意味なことはないというか。学びにならないね、と先生たちとも話しています。幼稚園、小学校の先生のお話でもあったように、子どもたち同士で言いあえる関係、ぶつかりあえる関係、その日あったことを気軽に話せる関係ができていないと、グループ活動は学びになっていかないということ、大学の授業でも実感しているところ、ここですよ。机が一人一個与えられて常に前を向いてちゃんと座っていて、先生にあてられて初めて発言したり、「いいです」「だめです」といった決まったセリフだけ言ったりす



るのではない、対話ができる場所をちゃんと確保しておくということが、この時から大切に考えられていたことに意味があるなって。

本田 私が思う小学校の問題点は、教える側の平等であって学ぶ側の平等にはなっていないことだと思うんです。決められた内容をこなさなくてはいけないという問題もあります。が、そのために、ここまでは教えたから後はできないのはあなたの責任、となってしまう、できないことを積み残して進級してしまう。以前、公立の小学校でも、計画表を使って個別の学習に取り組んだのですが、最後に子どもにアンケートを取ったら、「みんなでやる普通の授業（一斉授業）は、話を聞いていても聞いてなくても先に進む。だけど、個別の学習は自分がやらないと終わらない」とありました。

浜口 それ、何年生の子どもですか？

本田 六年です。卒業の時に書いてもらった

アンケートにありました。もう一つ、別の子が書いていたのは、自分が得意だと思うものはさっと進んで、苦手なものにはすごく時間をかけられるとありました。

浜口 なるほど。本来そうあってほしい。

本田 それ、子ども同士の間関係にとっても、すごく意味のあることになりました。個々で進める中で、できない子を責めるのではなく、助けあいながら一緒にできるようにするような関係性になっていました。それが安全、安心にもつながってくると思います。山内先生も、そういうことをすごく大事にされている。山内先生、算数の先生なんです。すごく柔らかな実践をされていて、昭和二年の『児童教育』（戦前から続くお茶大附属小学校の研究誌）の中でも、表したいことを文字だけでなく、絵とかいろいろなもので表現することをすごく大事にして実践されているんですよ。それがどういふうに進んでいった

かっという記録も残っていて。先生がすごく柔らかなのを感じます。

永倉 この時代の「一斉教授」って、今よりもっと……。

本田 がちっとしてる。だからその対比の意識がすごく強いんだろうというのと、子どもが「今したい」というその必要性とか重要性をすごく大事にしようっていうところとか。そういうところはすごく強調されているんですよ。

杉浦 接続期の研究で、幼稚園はこれまで子どもたちを送る側の立場で言ってきたけれども、入ってくる側をどう受けとめていくのかということをあらためて考えているところで。今、二歳児の様子を観察に行ったり、三歳児を入園させる保護者はどう思っているのかなと探ったり始めていて、子どもたちを受け入れていく、そういう立場になってみるというところから研究を始めています。

タイムリーにこのアーカイブズ記事を読んだときに、小学校の先生、昔の方だけでも、家庭背景が違ってとか、幼稚園にちよつと行った人もいるとか、そういうことを思いながらちゃんと一人ひとりっていうふうを考えているっていうことが、本当に私ほうれしい。私たち幼稚園でもそれを踏まえて一人ひとり見ているとはいえ、多少乱暴なところがあつたんじゃないかな。自分たちに合わせて待たせたりするようなこととか……。もつとなめらかに、家庭から来た人たちが幼稚園で安心して生活できるために、冗談で「最初だけ半分ずつ交代で登園するのでもいいかもね」なんて話も最近することがあつて。本当に、一人ひとりについていうことがどういうことなのか、今あらためて考えているところだったので、これを読んで自分でも考えるきっかけが得られました。小学校のように、受け入れるというのを学ぶことも大事だなんて思いました。

浜口 山内氏の記事の時代は、就園率7%とか今と比べようもないぐらい少なかった。家庭からもたくさん来るし。

杉浦 最近、保育所から来る人もいる。

浜口 多様化ですね。

本田 共働き率は上がっていますか？

杉浦 上がってきてますよね。子育ての支援という課題も当然あるので、幼稚園としてもそこを文京区の子育て施設とかに学びに行ったりしています。(続く)

(二〇一八年八月七日)

